

東南アジアを世界史にどう位置づけるか

外語短期大学付属高校 石橋 功

一 はじめに

東南アジア史が世界史教育の中で今までなかったくらい、注目を集めている。今まで世界史の教科書の中で東南アジアは、インド文化圏の波及場所、中国文化圏の波及場所、イスラム文化圏の波及の場所、大航海時代の目的地、欧米列強の植民地としての東南アジア etc といった受動的な扱いを受けてきた。そして第二次大戦後、独立していく東南アジアで東南アジアの民衆の主体性が出てくるという流れであった。この流れに東南アジアの文化は独自のものではないという基本的なスタンスの東南アジア研究が日本でも進んだこと、今までほとんどされてこなかった海を主体に考えていく歴史観の広がり、世界史の一つの中心的地域として東南アジアを押し上げてくるようになった。

また従前の欧米中心史観である発展段階論での古代・中世・近代・現代（近年は early modern II 近世を中世と近代の間に入れることが多くなった）といった時代区分がほとんど使えない地域であることも東南アジアを中心に今後教えていく意味を多く持っている。さらに今までの政治史中心の欧米史・中国史・イスラム史に対して、重要な王朝・人名よりも都市・商業・ネットワークを中心にしている。東南アジア史学習の部分は従前中心的な部分の学習内容の見直しにつながるものを持っていよう。

二 発展段階論、陸中心政治史中心の世界史への批判

学問としての歴史学が細分化された結果、〇〇史観なる言葉自身が増え、旧来よりつまらない世界史、日本史学習となってきた。これにいい意味でも悪い意味でも問題提起したのが「教科書をつくる会」であった。ここでは本題ではないので別稿に譲るが問題提起だけはしておきたい。

ソ連を中心とした共産主義体制という全体主義体制を「社会主義段階」と位置づける発展段階論は一九九一年のソ連解体をもってその有効性は失われたにもかかわらずその亡霊がさまよい続けている。「市民革命」なる言葉がいまだに存在していることがその証左である。全体主義を賛美するような世界史を教えることが限り、民主主義を暴力で圧殺する「革命」を美化していく歴史を教える限り民主主義を担う生徒の育成はできないと考える。

陸中心史観はソ連を異常に巨大な国として、日本をちっぽけな島国とする見方を生徒に与え続けてきた。また陸でのつながりを重視するあまり国民国家として形成された一つのまとまりを歴史的まとまりという認識を生徒に与えてしまう危険性がある。

政治史中心の歴史に対しての批判としては次のことを指摘しておけば充分であろう。一五世紀最後のイギリス王を知っている生徒は神奈川県知事の名前を知っているだろうか？ 教師は現在の文部科学大臣その前の人物名を言えるであろうか？

欧米中心の歴史の見方の象徴的なものが東南アジア史の古典的名著であるアンソニー・リードの「The Age of Commerce」を「大航海時代の東南アジア」と訳したことである。アンソニー・リードの

「The Age of Commerce」は鄭和以降であり、ヨーロッパの大航海時代は「The Age of Commerce」への参入であったことからいうとおかしいのであるがそれを訳者が指摘しつつもこうした題をつけなければならぬほど「歴史」の病弊は深いのである。

三 豊かな東南アジア

昨年度、東南アジア専門の教育実習生の授業を聞いていて気づいたことをまず書いておきたい。実習生は東南アジアにほとんど知識がない生徒を相手に「東南アジアは豊かだったの、チャンパでは沈香が、ジャワでは胡椒が、モルツカ諸島ではクローブとナツメグが、チモールでは白檀が取れるの」と盛んに紹介していたのであるが、聞いている生徒は言われている物がわからない、また胡椒等のもつ意味がわからないので何で東南アジアが豊かか理解できないのであった。これは、今現在の物の価値の置き方と昔と違うことを指摘しないことからきている。このことはすべての物に関して言えることなので物の歴史的に持つ意味の検証が別途必要になろう。

まず前提としてこれらの物は世界でその地しか取れない物であったことを生徒に認識させなければならぬ。今のように植え替えが簡単に出来なかったことはこういった話の出発点である。

胡椒、クローブ、ナツメグといった香辛料に関しては「一九九四年度歴史分科会研究報告」と「身のまわりの世界史」に書いたので詳しくはふれないが、ヨーロッパ人にとってこれらの香辛料は富と権力の象徴であった。一七世紀香辛料に代わってコーヒー、砂糖がその立場になっていくと、一八世紀以降のオランダの支配は、海のネットワークの支配から陸中心の支配へと変化していく。その完成

が一九〇四年のオランダ領東インドの成立である。コーヒー、砂糖プランテーションの成立、その過程での砂糖精製職人としての中国人の流入が華僑の一つの出発点であった。

沈香は水に沈む木であることからそう呼ばれるようになった香木であるが、中国文化圏では珍重され中国への朝貢の見返りとして中国皇帝から下賜されたものである。沈香の高級品は伽羅とよばれ、現在も教材用に簡単に購入出来ない位高価な物である。伽羅の最高級品とされる正倉院御物「蘭奢待」が本能寺の変の理由にあげられたりすることを思えば、沈香の持つ意味は従前の歴史以上の影響があったと考えられる。沈香の産地—現在のヴェトナムの内陸部に中国が進出したこと（ローマ皇帝マルクス・アウレリウスの使いを名乗った商人が訪れたのもこの地である）、港市国家連合チャンパが栄え続けたこと等の説明は沈香の重要性から説明できるであろう。

白檀は中国文化圏でも香木として珍重されたがヒンドウ教徒はこれを宗教上重視し（白檀をベースト状にして額に塗って邪悪を避ける風習や、白檀の棺で焼かれることが最高の葬儀といったことが白檀の消費を支え続けた等々）、インドにとって極めて貴重な物であった。この産地チモールは白檀が取れるが故に、ポルトガルとオランダが分割した結果、東チモールはポルトガル領となつてキリスト教カトリックが根付き、西チモールはオランダ領となり、インドネシアの一部となつてイスラームが根付いて分断化が進んだ（この結果、世界最大のムスリム人口の国からカトリックの東チモールが独立するきっかけとなったことは言うまでもない）。

こうした観点で乳香と没薬を見ていくとユダヤ教、キリスト教において持つ歴史的な意味と、その延長にあるイスラームが乳香ロー

ドの中核マッカに起こった説明がつくことに気付くだろう。

四 世界商業の中心としての東南アジア

世界商品であった香辛料、沈香、白檀を算出する東南アジアは早い時期から世界の商人を引きつけていたようである。紀元前にギリシア商人の『エリュトララー航海記』に東南アジアが紹介されていること、扶南の外港オケオの遺跡からマルクスIIアウレリウス金貨が発見されていることから、ヨーロッパ人がこの地にインド経由で来ていたようである。マルコIIポーロ等のモンゴル時代の例外を除いてはヨーロッパ人がアジアを訪れていなかったということはムスリム商人が来る必要のない量の品物をヨーロッパに供給したことに他ならないであろう。「大航海時代」の過度の強調はヨーロッパ中心史観そのものであり問題多いものである。

杉山正明氏が主張しているように、シルクロード（絹の道）・海の道という言い方自体検証の必要がある。道は起点と終点を結ぶものであり、道の通っている地域を単なる通過点としてしまうと、ろに大きな問題点がある。東南アジアは中国からもヨーロッパからもインドからも商人を集めた地域であることは触れてきたが、シルクロードも絹を一方通行的にヨーロッパへ運んだだけではない。シルクロードが栄えた時代、中央アジアがヨーロッパ以上に繁栄していたの言うまでもない（サマルカンドのような大都市はヨーロッパにはほとんどなかった）。ヨーロッパと中国の双方から繁栄する中央アジアへ至る道がシルクロードであったはずである。終点とされるコンスタンチノープルで絹工業が栄えたのは暗示的な事実である。日本人は永くシルクに惹かれてきた。そのため世界中の人も同

じで、ヨーロッパ人も同様と考えるあまり過度に強調してきた気がする。今、この呪縛から解き放たれるときなのではないだろうか。

豊かな東南アジアが逆に他の地域から求めたものは何かというところ、まずインドの綿織物である。東南アジア各地域の富と権力の一つの象徴が綿織物であったことも重要な問題である。また中国製陶磁器も求めたものであった。日本が東南アジアから求められたのは銀であったのはいくまでもない。また「交易の時代」以降は戦闘員としての人間であった。

七世紀後半、マレー半島を横断するルートに代わってマラッカ海峡を通るルートが成立すると、ムスリム商人のダウ船が八世紀に唐に至ることになった。この結果、扶南は没落しオケオの繁栄が失われ、マラッカ海峡の重要性が今日に続くまで始まる。これは港市国家シユリヴィジャヤ（室利佛逝）がマラッカ海峡周辺の地域を支配し、季節風の関係で速度が低下するのを狙った海賊を押し退けたからである（八世紀以降、困難であったマラッカ海峡の通過が航海術の発達で可能になったのはもちろんである）。一〇世紀後半青磁や白磁のようなすぐれた陶磁器が生産され、中国からジャンク船によって東南アジア全般に運ばれるようになる。ジャンク船が活躍する南シナ海を中心とする「中国商人の海」とダウ船が活躍するインド洋を中心とする「ムスリム商人の海」が交錯するこの海域世界にはシユリヴィジャヤを始めとする多くの港市国家が繁栄していく。この港市国家の繁栄と東南アジアの豊かさを狙ったのがモンゴルの東南アジアへの征服活動であった。

この繁栄にさらに拍車をかけたのが一五世紀初頭の鄭和の遠征であり、この遠征により南シナ海からインド洋まで結ぶ「交易の時代」

の基盤が出来上がっていく。この基盤に一六世紀初頭以降食い込んでいったのがポルトガル等のヨーロッパ商人であった。

五 港市国家

今回の指導要領の改訂の大きな目玉は海のネットワークと海域世界の登場である。これは指導要領が今まで述べてきたような考え方を取り込んできたことは言うまでもない。海のネットワークと海域世界を理解する一つのキーワードが港市国家である。

従前からフェニキアのシドン・ティルス、北イタリアのヴェネチア・ジェノヴァ、マラッカ王国等陸地にその領土を陸に拡大してこなかった都市国家の学習をしてきたが、他の地域ではあまり見ることのない港市タイプの国家が東南アジアでは主流であったことから注目されるようになったのである。

港市国家はそのアイデンティティを自分の交易の相手都市に置き、周辺の農村との結合には置いていない。代表的国家がチャンパーである。チャンパー滅亡後、住民は現在のヴェトナム地に残っただけではなく海を越えて他の港市国家に移住している。また一世紀の南インドのチョーラ朝は領域拡大を北インドに向けてることなくスマトラに遠征軍を送り三仏斎という港市国家連合をつくったことなど一つ一つの例としてあげられよう。

東南アジアの港市国家の繁栄は東南アジアの中に東南アジアしかとれない生産物があったことに基づく。これをめざして世界から多くの船が訪れたことで中継地たる多くの港市国家が生まれ栄えたのである。また海域世界の発達が遠隔地商業を促進し、「交易の時代」は港市国家の繁栄を保証し続けた。しかし国民国家の形成以降、国

民意識を核とする商業活動の展開が港市国家の存在を許さなくなつたが、現在東南アジアには港市国家としてシンガポールが存在する。琉球も港市国家の典型ととらえられる。明の海禁策に巧妙に対応してマラッカ王国と同様の繁栄を誇つた琉球は「交易の時代」の終了とともに「陸の国家」薩摩藩に征服された。繁栄はなお続くが、この時点で独立した港市国家であることを終えたのである。

六 日本と東南アジアの関係

気候の共通性が大きいかもしれないが、日本と東南アジアの基層文化は共通するところが多い。魚と米を中心とした食生活、腰巻きなどの着衣に見る衣生活、木造高床式などの住生活等々の共通性がそれにあたる。こうした基層文化の上に、日本と同時期に大乘仏教を受け入れたことも興味深い。東大寺が建設されたほぼ同時期にポロブドゥール寺院がつけられている。日本ではこれ以降ヒンドゥ教、イスラーム、キリスト教（カトリック）がやってくる。現在では大陸部で上座部仏教、島嶼部でイスラーム、キリスト教が根付き、日本との文化的差異をつくつていった。

だが「交易の時代」の日本と東南アジアの関係は深いものがあつた。日本に来たヨーロッパ人が日本に持参したのは東南アジア物産品がほとんどで、ヨーロッパから持ち込んだ物ではなかった。代表的なものが鮫皮・鹿皮であった。日本で描かれた南蛮人の姿も、東南アジアで生活しているポルトガル人等の姿かたちであり、ヨーロッパ本国での姿かたちではなかった。

一六世紀後半から朱印船貿易が開始されるとヴェトナムの生糸の

需要が高まっていった。また朱印船を迎える「日本町」も各地で発達した。過疎地域であった東南アジアでは日本人傭兵に対する需要も多く、山田長政のような人物も多く輩出した。しかし日本の海禁策Ⅱ鎖国によって朱印船の来航はなくなり、日本町とヴェトナムの繁栄が失われていった。

一九世紀にはヨーロッパの植民地化が進んだが、東南アジアの豊かさは近代化日本以上であったようだ。この証拠に「からゆきさん」と言われた日本人売春婦の存在がある。逆に「じゃばゆきさん」の存在がみられるようになったのは一九八〇年代以降のことを考えると近代化イコール民衆の豊かさではないことも理解できよう（江戸時代の農民と明治時代の農民のどちらが「いい生活」をしていたか考えてみれば国家と地主の収奪が行われていなかった江戸時代の方が良かったのは自明のことである）。こうした東南アジアでもしいに国民国家形成のナシヨナリズムが高まっていった。このナシヨナリズムに大きな希望を与えたのが日本の東南アジア侵攻であった。第二次大戦で大東亜共栄圏をかかげた東南アジア侵攻は、占領下の日本語教育の強制のごとく現地の人々に大きな失望を残したが（今も残る日本語が「バカヤロー」と「トクムⅡ特務」というのも悲しい話である）、百歩譲ってもアウンⅡサンやビルマ独立・建国とスカルノのインドネシア独立・建国に日本の侵攻が大きな力になったことは歴史的に否定できないものである。

このようにヨーロッパ以上に日本との歴史的関係の深い東南アジアであるが日本の教育の中できちんと教えられてきたであろうか？ 残念ながらそうとは言えない。その表れが世界史における東南アジア軽視であった。今次の指導要領の改訂により東南アジア世界をひ

とつのもまとまった世界として扱う教科書も出現してきた。歴史の軸を欧米から東南アジアに移す時期がきたのかもしれない。

〈参考文献〉

岩波講座「世界の歴史」六巻

「南アジア世界・東南アジア世界の形成と展開」一一巻

「中央アジアの統合」一三巻

「東アジア・東南アジア伝統社会の形成」

岩波講座「東南アジア史」一〜九巻

「大航海時代の東南アジア」Ⅰ・Ⅱ

アンソニーⅡリード 法政大学出版局

「東南アジアの歴史」桜井由躬雄 放送大学教育振興会

日本の近世Ⅰ「世界史の中の近世」朝尾直弘編

「東南アジア近世の開始」桜井由躬雄 中央公論社

「歴史世界としての東南アジア」桃木至郎 世界史リブレット

山川出版

「東南アジア史整理のポイント」桃木至郎 歴史と地理 五六一

山川出版

世界の歴史一三「東南アジアの伝統と発展」石澤良昭

中央公論社

日本の歴史一四「周縁からみた中世日本」

「琉球の形成と環シナ海世界」高良倉吉 講談社

講座世界史八「戦争と民衆」歴史学研究会編「大東亜共栄圏」論

岡部牧夫 東京大学出版会